

初期キリスト教における聖人崇敬と民衆信仰

—聖女ペトロニッラの図像とその意味—¹⁾

山 田 順

目 次

1. 問題提起
2. 聖女ペトロニッラの図像
 - 2.1. 考古学的・地誌学的状況
 - 2.2. 図像学的証言
 - 2.3. 文献学的証言
3. カタコンベの聖人図像
 - 3.1. ペトロニッラの図像
 - 3.2. その他の聖人図像
 - 3.3. 新たな解釈の可能性
4. 異教的・民衆信仰的来世の表象
 - 4.1. 冥界への旅路
 - 4.2. ハーデスの扉
 - 4.3. 魂の導き者
 - 4.4. キリスト教領域への継承
5. まとめ

1. 問題提起

先頃、ローマ法王庁列聖省は、江戸時代初期のキリスト教迫害で処刑された、ペトロ岐部、中浦ジュリアン、ガスパル西玄可をはじめとする日本人殉教者188名を、聖人に次ぐ福者に列すること（列福）を決定した²⁾。

カトリック教会や東方正教会に特徴的な、このような死者を「聖人化」する

ための列聖や列福と、「聖人化された者（あるいはその遺物）」に対して表明される信徒による聖人崇敬の行為は、その起源が初期キリスト教時代にまで遡り、後の歴史のなかで徐々に制度化され今日に継承されている³⁾。なかでも聖人崇敬は、病氣治癒などの奇跡物語や伝承、聖人ゆかりの地（聖地）への巡礼行為などと結びつきながら、とりわけ一般信徒の生活に深く根付いた民衆的信仰形態のひとつとして、今なおプロテスタントを除くキリスト教文化圏において極めて重要な位置を占めている。

ところで、A. グレヴィチや P. ブラウンは、中世の西欧社会において大きく展開したこの聖人崇敬という現象を、「異教的西欧社会がキリスト教化していく過程の所産」として捉えており興味深い⁴⁾。

また、同様の認識に立つ小田内隆氏によれば、ゲルマン人の移住と定着後、異教的土着文化の伝統を色濃く留める農村地域のキリスト教化に直面した教会は、このような「前キリスト教的慣習（異教の聖所、祈祷師、占い師、魔術師、呪文や護符、病氣治癒など）」に適應させながら新しい信仰を広めなければならぬという困難な状況におかれたが、この適應過程において、聖人崇敬が決定的役割を果たしたと指摘する⁵⁾。すなわち、異教的時間・空間と結びついた多くの「前キリスト教的慣習」が、教会によって新たに提供された特定の聖人とその崇敬行為に結び付けられることで、その多くが、キリスト教精神領域の内部に絡め取られ、包摂されていったという⁶⁾。

このように異教的民衆信仰やその信仰の表明形態が、新たなキリスト教的意味付けや読み替えを経ながらキリスト教内部に受容された可能性に注目することは、とりわけ古代末期から中世初期にかけて、異教世界からキリスト教世界へと大きく転換する初期キリスト教時代の、主に一般信徒レベルでの多様な文化的・信仰的变化の諸相を解明するために極めて重要である。

キリスト教迫害期に多くの殉教者が埋葬され、後にキリスト教世界の重要な巡礼地のひとつとなったローマの地下共同墓地（カタコンベ）は、まさにキリスト教聖人崇敬が発生し大きく展開した最初の舞台であった。そこには、個々の信徒の墓の傍らに描かれた殉教聖人の素朴な図像や、彼らの篤い保護や執り

成しを祈念するために刻まれた碑銘，落書き (*graffiti*)，巡礼者のために造られた地下の記念聖堂など初期の聖人崇敬の痕跡が今なお色濃く残されている⁷⁾。

このようなカタコンベの聖人崇敬について，これまで多くの考古学的，図像学的研究が行われてきたが，残念ながらそれらのなかにグレヴィチやブラウンが指摘するような異教的民衆信仰との関連性を積極的に見ようとするものはほとんど存在しない。今なお多くの巡礼者を惹きつけてやまない「聖地」カタコンベに残された聖人崇敬の中に，あえて異教的関連性を見出そうとする視点は，ヴァチカンを中心としたこれまでのカタコンベ研究の伝統のなかでは，あまり馴染まないものであったのかもしれない。

今回筆者は，ローマはアッピア地区にある大規模カタコンベに描かれた殉教聖人のひとつの図像に注目し，この作品と当時の異教的葬礼図像との関連性を指摘したい。このようなカタコンベの考古学的・図像学的研究手続きを通して，キリスト教内部で発生した殉教聖人への崇敬行為の初期段階において，ひとつの素朴な異教的民衆信仰の断片が取り込まれていた可能性を指摘すること，これが本稿の目的である。

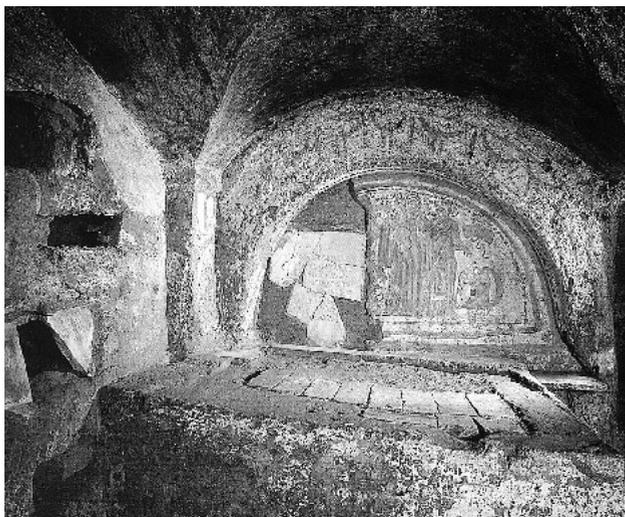
2. 聖女ペトロニッラの図像

アッピア街道とアルデアティーナ街道に挟まれた一帯は，ローマのなかでも特に大規模カタコンベが密集した地区として知られる。本稿で問題とする図像は，この地区に存在するドミティッラのカタコンベから発見されたひとつの墓室15 (Nr)⁸⁾内部に描かれた聖女ペトロニッラの図像 (図1 a/b) である⁹⁾。

2.1. 考古学的・地誌学的状況

図像学的考察に向かう前に，まず，問題の壁画が描かれた墓室の状況について，考古学的・地誌学的に正しく把握しておくことが重要である¹⁰⁾。

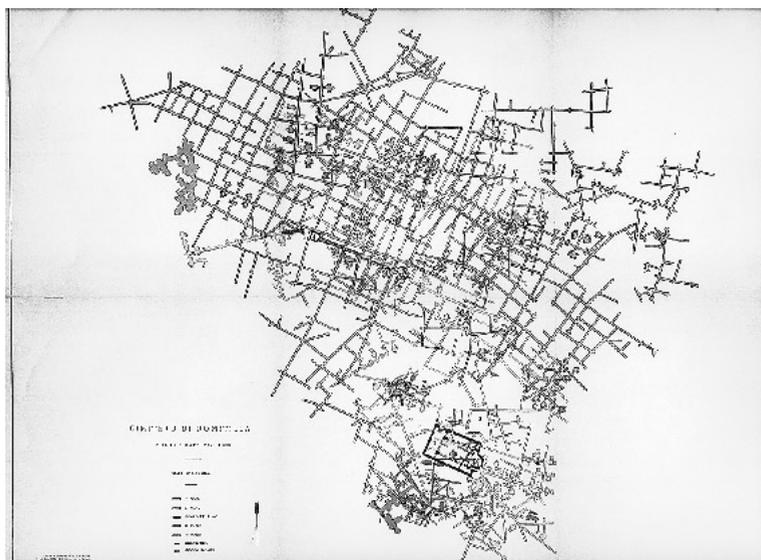
ドミティッラのカタコンベ (図2) の本格的発掘が始まったのは1874年のことであった。この年，キリスト教考古学の父と呼ばれた G. B. デ・ロッシの発掘によって，地表近くから煉瓦造りの半地下聖堂 (*basilica semi-ipogea*) が姿



図版 1 a ヴェネランダの墓室・壁画とその周囲



図版 1 b ヴェネランダの墓室・壁画：スケッチ

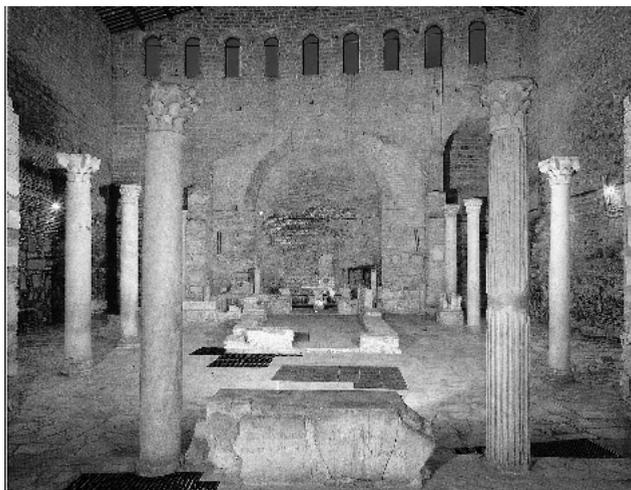


図版2 ドミティッラのカタコンベ平面図：全体

を現す（図3）。デ・ロッシは、その内部から発見された大理石の碑文の断片と一本の記念柱に刻まれた殉教者像から、この聖堂が、ディオクレティアヌス帝（在位284-305）の大迫害による殉教者として知られるネレウスとアキレウスを記念して建立された殉教者記念聖堂であることを明らかにした。

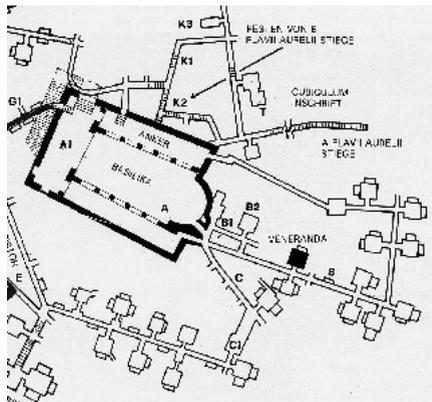
この聖堂は、埋葬された二人の殉教者の墓を中心に、その周囲の墓と壁面を破壊しながらカタコンベ内部に嵌め込む形で建立されており、二人の殉教者を記念すると同時に、ミラノ勅令以降すでに大挙してこの地を訪れていた巡礼者たちの便宜を図るために建てられたものと考えられる。建立年代に関しては、教皇ダマズス（在位366-384）による二人の殉教者を称える碑文が存在することから、同教皇によって建立されたか、あるいは、すでに存在していた小規模地下聖堂を取り壊す形で、ダマズスの後継者らによって、4世紀末に建て替えられたとする説が存在する¹¹⁾。

デ・ロッシの発掘によって、さらに、この半地下聖堂のアプシス背後から、



図版3 ネレウスとアキレウスの半地下聖堂：内部

一般に「レトロサンクトス」(*retrosanctos*)¹²⁾と呼ばれる地区が発見された。「レトロサンクトス」とは、コンスタンティヌス帝治世以降のカタコンベ地誌学において特徴的な発展パターンのひとつで、聖人の墓の近隣に埋葬されたいという当時のキリスト教徒の素朴な「近接埋葬願望」を強く反映して、殉教者の墓の周囲に一般信徒の墓が密集して発展した地区をいう。本稿で問題とする壁画が描かれた墓室15 (Nr.) は、1874年、半地下聖堂の背後に広がるこのような地区から発見された¹³⁾ (図4)。

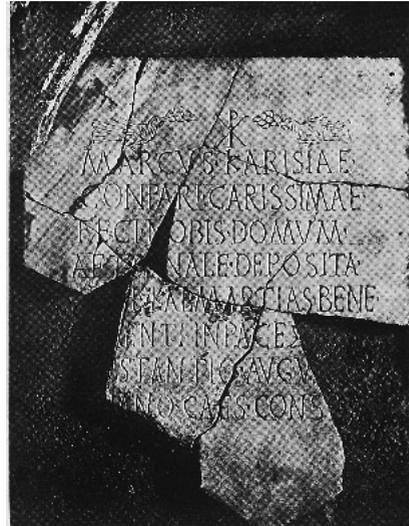


図版4 ドミティッラのカタコンベ平面図：レトロサンクトス—半地下聖堂アプシスの背後に展開した地区とベネランダの墓室

さて、墓室15 (Nr.) の内部は、入り口正面に大きなアルコソリウム (アー

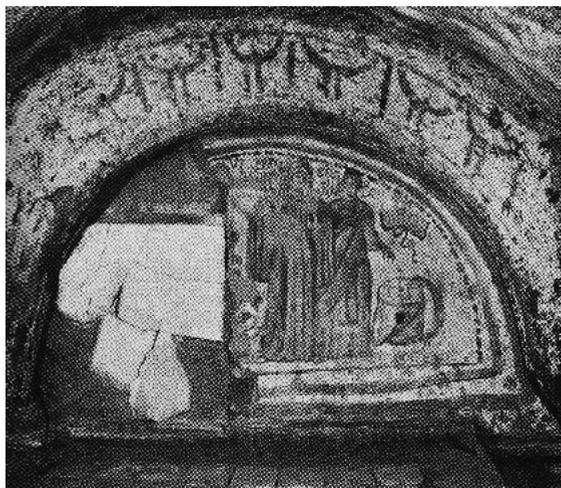


図版5 ヴェネランダの墓室・壁画：デ・ロッシによる発掘当時のスケッチ：左端に二基のロクルス（柵型墓）が確認できる



図版6 ヴェネランダの墓室：カリシア（Karisia）の墓碑

柵型壁龕墓）が存在し、その前には凝灰岩ブロックによって囲まれた一基の石棺状の墓が設置されている。デ・ロッシによる発掘当時のスケッチ（図5）を見ると、復元修復前のアルコソリウム・リュネッタ（奥壁）には二基のロクルスが存在していたことがわかる。また、発掘によって墓室内部から破断された墓碑銘の断片が発見されたが、これは後にデ・ロッシの手によって、本来存在した場所と考えられる同アルコソリウム・リュネッタ左側に設置された¹⁴⁾。この復元された墓碑銘は某カリシア（Karisia）に捧げられたもので（図6）、おそらく、リュネッタに掘られた二基のロクルス（柵型墓）のどちらかに埋葬された故人に捧げられたものと考えられる。墓碑銘の内容から、ここで問題とする壁画との直接の関連性はないものと考えられるため、本稿での詳述は割愛する。



図版 7 ヴェネランダの墓室・壁画全体

2.2. 図像学的証言

さて、問題の壁画図像を見てみよう。デ・ロッシによってその左半分にカリシアの墓碑が復元設置されたリュネッタには、元々、全面に乳白色の化粧漆喰が塗られ、その上にフレスコ画法で装飾が施されていたことが推測される。墓碑銘で破壊された左側に対して、右側半分には比較的保存状態の良好な二人の女性図像が描かれている（図7）。左側の女性は、ダルマキア風の長衣を身に纏い、頭にヴェールを被り、両手を左右に大きく広げた故人を表す典型的な表現姿勢（*expansis manibus*）、いわゆるオランス像の姿で描かれている。この女性は、その横に書かれた銘文—《*VENERANDA DEP[OSITA] VII IDUS IANUARIAS*》（ヴェネランダ 1月7日に埋葬された）—の存在によって、この墓室に埋葬された故人ヴェネランダを表していることが理解される。カタコンベの図像学において、埋葬された故人を描く場合、その多くがこのように、すでに彼岸の楽園において至福のうちに在ることを暗示する、オランス像のポーズで描かれるのが一般的であった。

一方、ヴェネランダの右後方に寄り添うように描かれたもうひとりの女性は、

右手を上挙げ、しかし左手は大きく下にさげ、上体を右側に傾けるといふ、一見不可思議な姿勢で描かれている。また、この女性は、ヴェネランダとは異なって、より古い時代の人物像を描くときによく用いられるように、古代ローマの伝統的な女性用トゥニカとパリウムを身にまとう。傍らに添えられた銘文—《PETRO/NELLA MART[YR]》（「ペトロニツラ 殉教者」）—は、この女性が、後述するような複数の古代文献にその名が登場する聖女ペトロニツラであることを示している。

この二人の女性像の他に、フレスコ画面上の余白には、聖書を象徴する開かれた一冊の書物、その下には、巻物状の書物 (*volumina*) が詰まった筒、いわゆるカプサ (*capsa*) が描かれ、故人ヴェネランダが生前、日々聖書に勤勉に学び、それらに従って正しく生きたことを証言している。また、ヴェネランダの左側、画面左端には、墓碑銘の設置によって多くが破壊されてしまったものの、色鮮やかな赤い花と緑の葉の一部が確認できる。このような草花の装飾図像は、しばしば、天上の楽園 (*giardini celeste*) を象徴的に描出しており、故人ヴェネランダの魂がすでに天国で憩う様が祈念されていると考えられる¹⁵⁾。

この壁画の制作年代については、発掘にかかわったデ・ロッシによって4世紀後半のものと推測されている¹⁶⁾。前述のように、壁画が描かれた墓室は、4世紀後半に建立された半地下聖堂を意識して発展した「レトロサンクトス」に位置していること、また壁画の様式的特徴からも、今日、4世紀後半もしくは4世紀末という年代が妥当なものと考えられている。1994年、教皇庁考古学監督局による壁画の洗浄修復の際に、R. ジュリアーニによって行われた女性像の髪形分析から導き出された年代もこれを傍証するものとなっている¹⁷⁾ (図8 a/b)。

2.3. 文献学的証言

さて、このようにひとりの故人ヴェネランダに寄り添うように描かれた聖女ペトロニツラについて、その図像学的考察を行うにあたって、まず、この聖女が何者であったのか、彼女にまつわる伝承を拾い集めておこう。



図版 8 a デ・ロッソによるヴェネランダの壁画スケッチ：頭部拡大図



図版 8 b ローマ時代の婦人像彫刻：頭部拡大（4世紀後半）

聖女ペトロニッラについては、彼女自身の殉教伝が存在しておらず、有用な文献学的資料は僅かである。現在のところ、ここで扱う銘文付の壁画図像が、文献学的にも考古学的にも最古の資料とされている。この図像資料によって、少なくとも4世紀後半に、ペトロニッラというひとりの女性が殉教者として知られており、その崇敬行為が信徒の間で一般化していたことが確認される。

ペトロニッラに関するその他の証言としては、5世紀末から6世紀初めのローマ巡礼資料のひとつである「パピルス・オイルリスト」¹⁸⁾（モンツァ大聖堂博物館所蔵）のなかに、この聖女の名が、同じカタコンベに埋葬された殉教者ネレウスとアキレウスの名前の直前に登場する¹⁹⁾。このオイルリストは、グレゴリウス1世（在位590–604）の時代に、皇女テオドリンドの特命を受けたひとりの司祭某ジョヴァンニが、当時のローマのカタコンベに存在した複数の殉教者の墓を訪れ、それぞれの墓に灯されたオイルランプのオイルを、陶製やガラス製の小瓶に採取し、そのオイルサンプルに、採取した墓の殉教者リストを記した一片のパピルス紙を添えたものである。このことから、少なくとも5世紀末から6世紀初めに、殉教者ペトロニッラのものとして伝えられる墓がドミ

ティッラのカタコンベ内部に実際に存在し、その場所が、巡礼聖地のひとつとして知られていたことが推測される。

その他、少なくとも7世紀まで遡ると考えられる巡礼案内 (*itinerari*) 「デ・ロチス《*De locis Ss. Martyrum*》」のなかでは、殉教者ネレウスとアキレウスに捧げられた前述の半地下聖堂が、ペトロニッラの名で記載されている：《*juxta viam ardeatinam ecclesia est sanctae petronillae...*》²⁰⁾。また、同じく少なくとも7世紀まで遡る巡礼案内に、ドミティッラのカタコンベそのものをペトロニッラのカタコンベと表記したものが存在する²¹⁾。これらの文献学的証言は、断片的ではあるものの、7世紀のローマ巡礼において、この聖女への崇敬行為が、巡礼者など一般信徒の間で依然かなりの人気を博していたことを伺わせる。

ペトロニッラの殉教に関しては、その詳細を証言する有効な資料は今日まで発見されていない。唯一、5世紀半ばまで遡る『ヒエロニムスの殉教伝 (*martirologio hieronymianum*)』²²⁾に、ネレウスとアキレウスの殉教聖日が5月12日に、そしてペトロニッラの名が同月31日に登場する²³⁾。

最後に、ネレウスとアキレウスの殉教伝²⁴⁾にこの聖女の名が僅かに登場する。そこでは、驚くことに、彼女は外典文書ペトロ行伝に登場する使徒ペトロの娘と同一視されている。それによると、彼女は、父である使徒ペトロによって奇跡的に病から癒されたという。同殉教伝には、聖女の死の理由や埋葬場所についての記述はないものの、二人の殉教者ネレウスとアキレウスは、「ペトロの娘ペトロニッラが埋葬された墓の近くに」《*juxta sepulchrum in quo sepulta fuerat petronilla apostoli petri filia*》²⁵⁾埋葬されたという。

このように、ペトロニッラの墓 (と考えられていたもの) に関しては、それがドミティッラのカタコンベにあったことを示す複数の古代資料が存在するものの、デ・ロッシによる発掘以来今日に至るまで、彼女の墓の存在を示す考古学的証拠は一切発見されていない。ちなみに、1910年、半地下聖堂内部の発掘を行ったO.マルッキは、聖堂床下から三つの石棺が安置されていたと思われる三つのニッチ (壁龕) を発見し、それらがネレウスとアキレウス、そしてペトロニッラの遺骸のためのものであったと結論づけている。しかし、このマルツ

キの説は、そのニッチのひとつをペトロニッラと結びつける根拠を全く有しておらず、ほとんど受け入れられなかった²⁶⁾。

このような状況から、聖女ペトロニッラの存在は、初期キリスト教時代の聖人伝承史のなかで度々確認されるように、今日では、伝説の中から生み出された実在しない聖人とする見方が一般的である。

なお、ペトロニッラの石棺なるものについて、教皇パウルス1世（在位757-767）が、757年、ドミティッラのカタコンベから当時の（旧）聖ペトロ大聖堂にそれを移したことが、『教皇歴代誌（*Liber Pontificalis*）』の同教皇の項に記されている²⁷⁾。この石棺は、1470年、ペトロニッラ礼拝堂の祭壇が修復された際に再発見され、1474年、シクストゥスIV世がルドヴィコXI世に宛てた書簡の中で描写されている。それによると、その石棺は4頭のイルカの彫刻をもつ浴槽型石棺で、中央には《*AUR · PETRONILLE · FILIAE · DVLICISSIMAE*》（「最愛の娘アウレリア・ペトロニッラへ [捧ぐ]」）という墓碑銘が刻まれていたという²⁸⁾。

前述の古代資料でみたような、ペトロ行伝に登場する使徒ペトロの娘ペトロニッラと、ドミティッラのカタコンベに埋葬された同名の殉教者とが同一視されるようになった背景には、この石棺とそこに刻まれた墓碑銘の存在が大きいと考えられている。つまり、この石棺と墓碑銘が使徒自身によるものとする時代錯誤的解釈が伝説化することで、いずれも同じ名をもつ、使徒ペテロの娘、カタコンベに埋葬された殉教者、石棺に埋葬された娘が結び付けられた、というわけである²⁹⁾。

このように、聖女ペトロニッラに関する文献学的資料は、彼女の殉教のあらましや実際の人物像はおろか、その存在を確認させる情報すら何も提供していない。にもかかわらず、それらの断片的証言は、このひとりの女性ペトロニッラが、すでに4世紀には、初期キリスト教徒のあいだでよく知られた殉教聖人として崇敬を集めており、さらにある時点から、使徒ペトロの娘ペトロニッラと混同されながら、ローマのカタコンベにおける聖人崇敬のなかで特に重要な位置を占めていたことを推測させる。

3. カタコンベの聖人図像

問題の聖女ペトロニッラの壁画に戻ろう。先に描写したこの聖女の図像には、これまでに明確に指摘されてこなかった、ある固有の図像学的要素が存在しているように思われる。以下、この聖女の図像の特殊性を指摘した後、さらにそれを顕在化させるために、カタコンベ絵画における聖人図像の他の作例との比較分析を行ってみよう。

3.1. ペトロニッラ図像

問題の聖女像について、先の考古学的・図像学的観察から得られる特徴は次の二点に集約されるだろう。

まず第1に、ここで殉教者として定義されている聖女の図像は、巡礼の対象となる殉教者自身の墓に記念碑的に描かれた聖人像とは性格を異にする。この図像は、あくまでも、4世紀後半のキリスト教一般信徒の家族のための埋葬空間（＝墓室）に描かれたものであり、したがって、そこに聖女像が描かれた意図は、故人であるヴェネランダというひとりの信徒の魂の救済に集中している。

第2に、ここに見る聖女ペトロニッラの姿は図像学的に特殊な姿勢を示している。前述のように、両手を大きく広げた姿（オランス像）の故人ヴェネランダが、やや右前方を虚ろな眼差しで見つめながらも、真直ぐな立ち姿で描かれているのに対して、ペトロニッラは、上体を微妙に右側に傾けながら、まるで、その傾いた体のバランスを取ろうとするかのように、上体から離れた左腕を不自然に右前方に突き出している。また、右側への傾斜とは裏腹に、彼女の頭部はしっかりと左側に向けられ、その眼差しは左前方に立つヴェネランダの横顔をヴェール越しに右後方から捕らえている（図9）。

両手を広げたオランス像の姿勢とダルマキア（長衣）のたっぷりとしたボリュームによって、全体的にどっしりとした安定感を醸し出すヴェネランダの姿とは対照的に、聖女ペトロニッラの図像には、肢体の微妙な傾斜からくる不自然な動性が感じ取られる。右上から左下に僅かに流れる彼女のトゥニカの裾の襷が、その動性を際立たせているように思える。



図版9 ヴェネランダの墓室・壁画：故人ヴェネランダ(左)と聖女ペトロニッラ(右)

3.2. その他の聖人図像

カタコンベ絵画における聖人図像は、先に言及したように、カタコンベに埋葬された聖人自身の墓に記念碑的に描かれたものと、信徒個人の墓や特定の家族のための墓室に描かれたものとに大別される³⁰⁾。

前者は、その場所に埋葬された殉教者や聖人を記念して、宗教的・政治的権力者や経済力のある寄進者によって奉献された図像である場合が多く、同時にそこには、その図像を見るであろう不特定多数の巡礼者や一般信徒の「まなざし」が前提されている。したがって、堂々とした威厳のある姿でキリストや聖母マリアの傍らに佇むように描かれる聖人像や、殉教者の伝承に基づく殉教図には、信仰のうちに生きる理想的信徒の模範像といった、当時の教会当局から巡礼者に向けられた教育的配慮やプロパガンダが背後に存在していることが推測される³¹⁾。

一方、本稿で問題としている聖女ペトロニッラの図像もそうであるように、



図版10 聖母子に故人トゥルトウラを執り成す聖人：コモディッラのカタコンベ地下聖堂

後者は、同じ共同墓地内部に描かれた聖人図像でありながらも、個人の墓や家族の墓室に描かれたものであり、そこでは、埋葬された特定の故人の魂に関する救済が最大の関心事となる。我々は、そのような個人の墓に、実際に聖人図像を注文した遺族の願いを読み取らねばならない。そのような図像に描出されているのは、愛する家族のひとりであった故人の死後の魂の救済であり、聖人像に具体的に祈念されているのは、神やキリスト、そして聖母マリアに対して行われる救済のための「執り成し」であろう³²⁾。

たとえば、オスティア街道沿いにあるコモディッラのカタコンベで故人トゥルトウラ (*Turtura*) のために描かれた壁画を見てみよう³³⁾ (図10)。そこには、宝石で飾られた玉座に座る聖母子像を中心に、その両脇に、このカタコンベに埋葬されたと考えられている殉教聖人フェリックスとアダウトゥスが、ニンブスのある個性的な肖像で凛々しく威厳のある姿で描かれている。向かって左側の若い聖人の手前には、聖母の前に恭しく歩み出る黒衣姿の老婦人トゥルトウ



図版11 「諸聖人の墓室」天井画：サンティ・ピエトロ・エ・マルチェリーノ・カタコンベ

ラが、他の人物像より控えめな大きさと描き込まれている。彼女の肩におかれた後方の聖人の右手は、この聖人が、聖母に故人トゥルトウラの「執り成し」を行っていることを表している。

また、カタコンベ壁画の傑作のひとつとして知られる、サンティ・ピエトロ・エ・マルチェリーノのカタコンベの「諸聖人の墓室」に描かれた天井画³⁴⁾（図11）では、上段中央に玉座のキリスト、その両脇にペトロとパウロがキリストに向かって大きく踏み込むようなダイナミックな動きで描かれ、さらに画面下段には、このカタコンベに埋葬されたと考えられる4人の殉教者、ゴルゴニウス、ペトルス、マルケリーヌス、ティブルティーヌスが、画面中央の天国の丘の上に立つ「神の子羊」に向かって、それぞれ片手を高く上げた称揚のポーズで登場する。

4世紀末から5世紀初めの作品と考えられるこの荘厳な壁画もまた、あくまでも一般信徒のための墓室を飾るものである。ここでは、通常、墓室内部の壁面のなかでも、天上界の様子をテーマとして描かれることが多い天井部に、キ



図版12 ドミティッラのカタコンベ墓室39 (Nr.) 壁画：上部アプシスに「キリストと使徒たち」、その下のアーチ上部壁面に「6人の聖人とキリスト」、その下のアルコソリウム（アーチ型壁龕墓）には死者が埋葬されていた。

リストと使徒，そして殉教聖人たちというように，天国の様が上下二段の「空間のヒエラルキー」³⁵⁾のなかで展開されている。そこには，先のトゥルトウラの壁画のように故人の姿は登場しないものの，当然，ひとつのファミリーの墓室の天井画に描かれた聖人には，墓室側壁に実際に埋葬されている家族のために，キリストへの「執り成し」を行うことが希求されているだろう。

4世紀後半頃から出現するこのようなカタコンベ絵画における「空間のヒエラルキー化」では，明らかに，墓室内に実際に埋葬された死者たちが，中間的存在者としての聖人，そして最上位に座すキリストという位階構造のなかに組み込まれるよう意図されている。それは，ドミティッラのカタコンベ墓室39 (Nr.) の図像プログラムのなかでより明確に理解される³⁶⁾ (図12)。そこでは，墓室入り口正面の天井を大きく抉り取るように造られたアプシス状の最高位の装飾空間に，12使徒たちによって囲まれた玉座のキリスト像が描かれ，その下部空間である側壁には，男女それぞれ3人ずつの聖人図像が展開されている。

さらにその聖人図像の真下、大きく開けられたアルコソリウム（壁龕墓）内部には、実際にこの墓室を担う家族が埋葬されているのである。この狭い墓室内部に展開された空間造詣と図像プログラムは、墓室内に埋葬された故人の聖人の助力による救済という、ひとつの明確なコンセプトによって貫かれている。

このように、個人の墓や墓室に描かれた聖人には、当然ながら、埋葬された故人の魂をキリストや聖母へ「執り成す」という働きが希求されており、その働きを通して、故人の魂が、すでに天上界の秩序の中に組み込まれていることを保証しようとしているのである³⁷⁾。

3.3. 新たな解釈の可能性

以上のようなカタコンベ絵画における他の聖人図像との比較を通して、問題のペトロニッラ像の図像学的特性がより先鋭化される。

われわれの墓室の壁画では、それが個人の墓室に描かれたものであるにもかかわらず、先に見た聖人図像や墓室の図像プログラムのように、聖人による故人の「執り成し」が前提とするような図像上の特徴が希薄である。つまり、そこには、聖人による「執り成し」の「交渉相手」であるはずのキリストや聖母の姿、あるいは、さらに大きな助けとなる使徒たちの姿が登場しない。また、聖女ペトロニッラと故人ヴェネランダの図像の間には、なんら図像上のヒエラルキー的差異が存在していない。つまり、故人ヴェネランダの姿は、先の故人トゥルトゥラのように聖人像より控えめなスケールで描かれることもなく、また、聖女ペトロニッラが故人より高位の空間に描かれることもない。

このように観察を深めるとき、このヴェネランダとペトロニッラの図像が、聖人像と故人像が同一装飾空間上に、まるで友人や姉妹のような親しきで描かれるという、カタコンベ絵画の中でも稀有な作例であることに気づかされるのである。この図像に描出されているのは、故人—聖人—キリスト（あるいは聖母）といった垂直方向の関係のかなで実現される「執り成し」や救済ではなく、傍らに寄り添いながら姉妹のように故人を導く、同伴者あるいは導き者としての聖人の姿である。

筆者は、ここで、このような図像学的特性をもとに、この作品と、同じ古代



図版13 ヴィヴィアのアルコソリウム奥壁・壁画：故人ヴィッピアを冥界へ導く善き天使



図版14 クリスピナの墓壁画：オッタヴィアの墓所メルクリウスによって冥界の野に到着したクリスピナ

末期の葬礼美術領域に存在した異教的同伴者図像との類似性を指摘したい。たとえば、アッピア街道沿いのヴィビアのカタコンベに存在する、サバティオス教信者であったヴィビアのアルコソリウム（4世紀後半）の壁画では、今しがた冥界に到着したばかりの故人ヴィビアが、「善き天使」（*angelus bonus*）によって親しげに手を引かれ同伴されながら、冥界の門をくぐり、賑やかな宴の席へと導かれている³⁸⁾（図13）。また、オッタヴィア家の霊廟の幼児クリスピナの墓に描かれた壁画では、古代末期の来世の表象のひとつとして人気のあった、草花が咲き乱れる「エリシウムの野」に、鳩が引く馬車に乗せられて運ばれてきたばかりの故人クリスピナが、魂の同伴者としてのヘルメス神によって、大きく体を右に傾ける仕草で導かれている³⁹⁾（図14）。同様の魂の導き者ヘルメ

ス神は、先と同じヴィビアの墓にも、故人を冥界に連れ行くハーデス神の馬車を引く御者として、同様に体を大きく右に傾けた姿で登場している（図18）⁴⁰⁾。

本稿が問題とする聖女ペトロニッラの姿は、図像学的見地から見ると、カタコンベの他の聖人図像よりも、むしろ、このような非キリスト教的葬礼美術に見られる死者の魂に寄り添う異教的同伴者の姿を容易に想起させるものである。そこで、以下に、古代末期のローマ社会において一般的であった死者の魂の異教的同伴者、および、それに関連した異教的来世の表象概念について短く触れておこう。

4. 異教的・民衆信仰的来世の表象

ここでは、まず、古代末期のローマ社会において、いわゆる民衆信仰として広く存在していた来世の表象のなかから、互いに関連した三つの表象概念である、(死者の魂の)「冥界への旅路」、「ハーデスの扉」、そして「魂の導き者」について概観する⁴¹⁾。その後、それらの異教的表象概念が、実は、4世紀のキリスト教の葬礼美術領域においても、極めて身近なものとして存在していたことを明らかにしたい。

4.1. 冥界への旅路

死者の魂の「冥界への旅路」という表象は、古代末期の地中海世界における様々な民族の民衆信仰的来世の表象のなかに確認される⁴²⁾。それによれば、人が死ぬと、死者の魂は、この世から遠く離れた「幸福な魂の住処」に向かって、邪悪な力が満ち溢れた危険な旅路に旅立たねばならない。古代エジプトでは、死者は「至福者の野」に向かって安全に旅するために『死者の書』に記された詳細な規則に従わねばならないと考えられていた。ギリシア人もまた『アエネイス』に見られるように、「エリュシオンの野」（冥界）に向かう死者の魂の旅路という表象を証言している。それによれば、冥界への道の途中には靈魂の裁判官が待ち受ける岐路が存在し、エリュシオンに入るに値するものと、タルタロスに投げ込まれるべき邪悪なものとを分ける。エトルリアの賢者タゲスの作

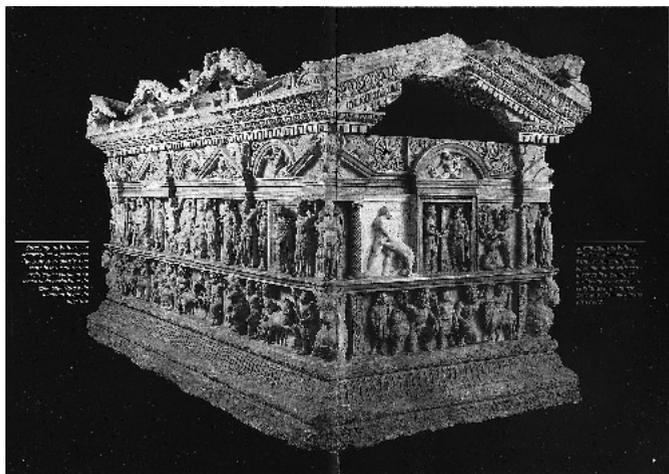
として知られる『アケロンの書』(リブリ・アケルンティキ)もまた、死者の運命と地下世界へ行く道筋について記している。また、彼らの石碑や火葬用壺には、冥界への旅路が図解されており、墳墓の壁画には、冥界への旅路に出発する死者の騎馬像の作例が数多く見られる。さらにエトルリア、ギリシアの伝統文化を受け継ぐ古代ローマにおいてもまた、この「冥界への旅路」の表象が確実に受け継がれている。イタリアで発見されたオルフェウス教の護符には、彼岸への案内書の断片が記されているという。また、ローマで発見された3世紀のアウレリウス家の霊廟壁画には、故人が騎馬姿で冥界に到着する様子が描かれている⁴³⁾。

4.2. ハーデスの扉

2世紀末から4世紀初頭にかけて制作された古代ローマの異教石棺のなかに、通称「ハーデスの扉」と呼ばれる、両開きの扉を配した一群の石棺が存在する⁴⁴⁾。もともと、エトルリアの墳墓壁画に多く見られるこのような扉は、明らかに、生の世界と死の世界の境界に位置する冥界の入り口であると同時に、死からの再生あるいは生還を可能にする出口でもある。中部イタリアのヴェレトリで発見された石棺⁴⁵⁾のレリーフでは、この世と冥界を行き来する能力を有するヘルメス(=メルクリウス)神やヘラクレスが、僅かに開かれた「ハーデスの扉」から顔を覗かせ、死者の冥界への旅立ち、あるいは、死からの再生・復活を暗示している(図15)。また、ローマのラティーナ街道沿いから発見された「ヴィア・ディノ・コンパーニのカタコンベ」の墓室からは、壁面に大きく描かれた「ハーデスの扉」から冥界に旅立つ(あるいは帰還する)故人の姿が描かれており興味深い⁴⁶⁾(図16)。

4.3. 魂の導き者

古代末期のローマ帝国内に見られる異教的葬礼美術には、先の「冥界への旅路」という死後の表象概念を前提に、主にギリシア・ローマ神話に登場する、冥界とこの世を往還する神々たちが、死者の魂を危険な旅路から守り導く、いわゆるプシュコポンボス《魂の導き者》として頻繁に登場する。たとえば、ヴァチカン博物館所蔵の古代ローマの火葬用遺灰箱には、開け放たれた「ハー



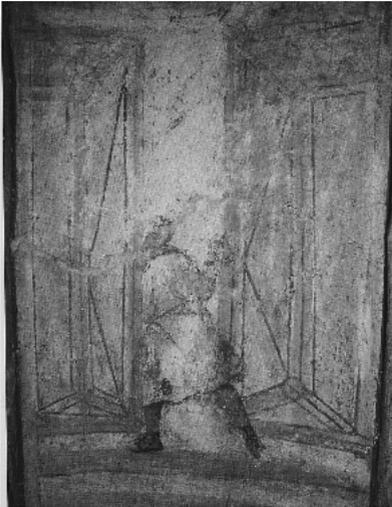
図版15 ヴェレトリの石棺



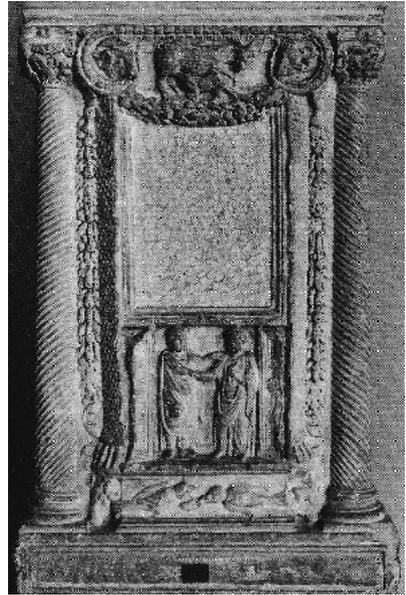
図版15a 「ハーデスの扉」からアルケステイスを連れ出すヘラクレス



図版15b 「ハーデスの扉」からプロテシラオスを連れ出すメルクリウス



図版16 「ハーデスの扉」から外に出る故人：ヴィア・ディノ・コンバーニ・カタコンベ



図版17 古代ローマの火葬用遺灰箱：ヴァチカン博物館

「ハーデスの扉」の前で、故人を冥界への旅路へと誘う（あるいは逆に故人を冥界から連れ戻した）プシュコポンポス（神名は特定不能）の姿が見られる⁴⁷⁾（図17）。また、先に言及したヴェレトリの石棺上では、ギリシア神話に由来する「冥界からの連れ戻し」の物語が「ハーデスの扉」からの脱出という形で描き出されている。そこでは、ひとつの「ハーデスの扉」から一人の女性（おそらくアルケステイス）を連れ出すヘラクレスが（図15a）、また、別の扉からは、一人の男性（おそらくプロテシラオス）を引き出すヘルメスが、それぞれプシュコポンポス役で登場する（図15b）⁴⁸⁾。

4.4. キリスト教領域への継承

このような、一見異教的な来世の表象に関するモチーフである「ハーデスの扉」や「魂の導き者」、そして、しばしばそこに前提されている「冥界への旅路」は、コンスタンティヌス帝によってもたらされた「教会の平和」以降のキ

リスト教ローマ社会にあっても、直ちに消失することはなかった。4世紀中頃から5世紀初め頃までのローマのキリスト教共同墓地とその周辺を見渡すと、これら異教的・民衆信仰的来世の表象が、いまだ、キリスト教一般信徒の極めて身近なところに、生き生きと存在していたことが伺える。たとえば、1955年、ローマのラティーナ街道地区の住宅街で発見されたヴィア・ディノ・コンパーニのカタコンベは、キリスト教も含めた宗旨宗派を異にする複数の家族によって、墓室別に住み分けされた特殊な共同墓地であったと考えられているが、そこには、冥界に降り立ちアルケステイスを連れ帰るヘラクレス（冥界の番犬ケルベロスを伴って）という明らかに異教的来世の神話モチーフが、キリスト教徒の墓室の目と鼻の先に（従っていつでも凝視できる位置に）隣接する形で描かれている。同じような状況は、先に言及したアツピア街道沿いのヴィビアのカタコンベでも確認される。そこでは、無数のキリスト教徒の墓に囲まれるように存在するサバティオス教信者ヴィビアのアルコソリウムに、「魂の導き者」としてのヘルメス神が描かれている（図18）^{49）}。

このような異教徒の墓とキリスト教徒の墓が同一カタコンベ内に並存するという状況は、それぞれの墓に描かれる図像モチーフやテーマが、相互に交錯することを可能にする、そのような親和的土壌が存在していたことを物語っている。

そのような状況下では、時に、キリスト教美術領域の内部にまで、異教的図像モチーフが（あるいは異教神の図像そのものが）取り込まれることが可能になる。たとえば、ローマのサン・セバスティアノー・カタコンベでは、長年、謎の人物像と考えられてきた裸の男性像が、1996年の洗浄修復による新たな図像データによって、明らかにキリスト教徒の手によって描かれたヘルメス神の図像（図19）であることが明らかになっている^{50）}。また、ヴィア・ディノ・コンパーニのカタコンベのキリスト教徒の墓室からは、「ハーデスの扉」から抜け出す1人の男性像の後方に、寄り添うように描かれたもう1人の男性像の存在が確認されているが^{51）}、TH.クラウザーは、ここに、プシュコポンプスとしての異教神ヘルメス像を見る^{52）}。そのほか、辻佐保子氏によれば、400年前後



図版18 故人ヴィビシアを連れだ冥界の神プルトーの馬車を、冥界へと導くメルクリウス (C. チェッケリによるスケッチ)



図版19 「魂の導き者」ヘルメス=メルクリウス：
サン・セバスティアーノのカタコンベ

に主にローマか北イタリアで制作された一連の「聖墳墓まいり」と呼ばれる図像（墓を訪れた女たちに天使がキリストの復活を告げるという福音書のモチーフ）をもつキリスト教象牙浮彫には、明らかに「ハーデスの扉」の異教的図像伝統が継承されていると指摘する⁵³⁾。

このように、4世紀から5世紀初め頃までのローマのキリスト教埋葬領域とその周辺部には、「ハーデスの扉」や「魂の導き者」などの異教的・民衆信仰的来世の表象概念が、いまだ強い生命力を保ちながら、生き続けていたことが理解される。確かに、4世紀初めに出されたコンスタンティヌス帝による寛容令以後、キリスト教への改宗者は爆発的增加の一途を辿るが、それは、決して、改宗して間もない一般信徒が、即、長年慣れ親しんだ数々の異教的伝統や習慣を、一夜にして放棄するということを意味していない。とりわけ、「冥界への旅路」や死者の「魂の導き者」など、キリスト教が積極的にその「代替モチーフ」を提供していない来世の表象について、人々は、古代ローマ社会の民衆信仰がもつ伝統表象に固執せざるを得なかったのではないかと⁵⁴⁾。

ここで問題となっているのは、キリスト教神学に精通し異端や異教徒と論争する神学者や教会指導者ではない。キリスト教へ改宗する直前まで、様々な異教的伝統を身に纏っていた一般信徒が、愛する者の墓前で、故人の魂の安全な「旅路」を願わずにいることが、はたして可能であったか。旅立つ故人の魂に何らかの「魂の導き者」を希求せずにいることが、はたして可能であったか。先述のサン・セバスティアノー・カタコンベで近年確認されたヘルメス像の存在は、まさに、このような4世紀のキリスト教一般信徒がおかれていた複雑な文化的・精神的状況を表出している。

5. まとめ

4世紀後半、殉教者の崇敬に関するローマ司教ダマズスの政策転換によって、ローマのカタコンベ各所に、殉教者を記念する公式モニュメントが登場し、殉教聖人の崇敬行為は過熱の一途を辿る。ローマ帝国領内各地から訪れる多くの

熱狂的巡礼者の間を聖人にまつわる様々な情報が流布して行くなかで、外典文書に由来する使徒ペトロの娘の逸話や、ある同名の娘の石棺と碑銘の存在などが、時に荒唐無稽に絡み合いながら、ひとりの聖女ペトロニッラなる人物の人気を高揚させた。4世紀後半、すでに彼女は、ドミティッラのカタコンベに埋葬された殉教者として、一般信徒の篤い崇敬を集めていた。

そのような状況のなかで、聖女の墓と信じられていた場所に近接して、ひとりの婦人ヴェネランダが埋葬される。遺族の手によってその墓室に、故人の肖像と、彼女に寄り添う聖女ペトロニッラの姿が描かれたとき、彼らはこの聖人に何を託したのであろうか。

この壁画では、個人の墓や墓室に描かれた他の聖人図像の作例と異なって、キリストや聖母への「執り成し」を行う、そのような「弁護人」としての聖人の図像要素が希薄である。むしろ、この壁画上では、聖人に、故人を優しく導く「同伴者」としての働きが託されているように思われる。さらに、そこには、死者の魂を冥界へと導く、異教的・民衆信仰的「魂の導き者」との図像学的類似性が感じ取られる。

故人ヴェネランダの遺族は、まずはともあれ、カタコンベ絵画で一般的であったように、草花が咲く天上の楽園に両手を広げて佇む故人の姿を描くことで、すでに彼女が天国で至福状態にあることを願った。しかし、同時に彼らは、ヴェネランダの背後に故人を導き守る聖女ペトロニッラの姿を特徴的な姿で描くことで、今や故人が無事に死後世界の旅路を終え、花咲く楽園である天国へと到着したことを、さらに祈念したのではないか。

4世紀後半、いまだ異教的伝統文化の只中に生きていた彼らは、キリスト教表象領域には存在しない「冥界への旅路」とその道中の「魂の導き者」という異教的表象概念を、キリスト教共同墓地という図像制約の中で、ひとりの聖女に託したのではないか。このように、ローマ・ドミティッラのカタコンベに見られる聖女ペトロニッラの図像は、4世紀後半のキリスト教一般信徒の間で行われた聖人崇敬のなかに、当時の異教的・民衆信仰的表象概念のひとつが継承されていた可能性を示唆しているのである。

注

- 1) 本稿は日本基督教学会九州部会（2007年3月27日、於：西南学院大学）において行った研究発表に、さらに大幅に加筆修正をおこなったものである。
- 2) 『毎日新聞』2007年3月4日（朝刊）「江戸初期キリスト教殉教者—188人に榮譽」より。
- 3) このような聖人崇敬に対する現在のカトリック教会の態度は、『新教会法典』1186—87条にまとめられている。それによれば、カトリック教会はマリアに特別な孝愛に満ちた尊敬を払うよう勧めるとともに、他の聖人たちに対する真の正しい崇敬を奨励する。それは信者が聖人の模範によって薰陶され、その取り次ぎによって助けられるためである、という。なお、宗教改革以来「聖人崇敬」を認めないプロテスタントの立場からすれば、それは「崇敬」ではなく「崇拝」となる。本稿では、便宜上、カトリックの習慣に従って「聖人崇敬」という言葉を用いた。
- 4) 聖人崇敬と異教的慣習に関しては以下の文献を参照、P.BROWN, *The Cult of the Saints. Its Rise and Function in Latin Christianity*, Chicago 1981; *ibid.*, “Relics and Social Status in the Age of Gregory of Tours”, *Society and the Holy in Late Antiquity* (New York, 1982); A.GUREVICH, *Medieval popular culture. Problems of belief and perception* (Cambridge University Press, 1988); 小田内隆「ボニファティウス時代の『偽預言者』について—西欧社会のキリスト教化と異端問題」立命館大学『立命館文学』534号, 1994年, 51-72頁; 渡邊浩「列聖手続きの歴史的展開—起源から教皇による列聖まで—」藤女子大学『キリスト教文化研究所紀要』2号, 2001年, 33-58頁; 指珠恵「アンブロシウスと聖遺物崇敬—アリウス派論争を中心に—」『西洋史学』149号, 1988年, 30-45頁。
- 5) 小田内隆, 前掲書, 69頁。
- 6) 同書, 70-71頁。
- 7) カタコンベにおける殉教聖人の墓の考古学的研究に関しては以下に詳しい: P. TESTINI, *Archeologia Cristiana*, Bari, 1980, pp.123-139, 405-450; D.MAZZOLENI, *Epigrafi del Mondo Cristiano Antico*, Roma 2002, pp.61-72; V.FIOCCHI NICOLAI, F.BISCONTI, D. MAZZOLENI, *Le Catacombe Cristiane di Roma. Origini, sviluppo, appariti decorativi, documentazione epigrafica*, Regensburg 1998.
- 8) Nr=A.NESTORI, *Repertorio Topografico delle Pitture delle Catacombe Romane*, Citta del Vaticano, 1993; *ibid.*, p.123.
- 9) 聖女ペトロニッラの伝承と画像研究に関する文献としては以下を参照; G.B. DE ROSSI, “Roma — Cimitero di Domitilla. Scoperta dell’immagine a fresco di S. Petronilla”, *Bulletino di Archeologia Cristiana* s.II, V, 1874, pp.122-125; *ibid.*, “Insigni scoperte nel cimitero di Domitilla”, *Bulletino di Archeologia Cristiana* s. II, VI, 1875, pp.5-43; G. WILPERT, *Le pitture delle catacombe romane*, Roma 1903, p.248; tav. 213; U.M. FA-

- SOLA, *La Basilica dei SS. Nereo e Achilleo e la catacomba di Domitilla*, Roma 1973, pp.24-26, 45-46 ; A.MORE, *I Martiri di Roma*, Roma 1975, p.201-202 ; P. SAINT-ROCH, “La martire Petronilla nella catacomba di Domitilla”, *Quaderni del Collegium Cultorum Martyrum* 3, Roma 1984 ; A. DI BERNARDINO, *Dizionario Patristico e di Antichità Cristiana*, Genova 1999, pp.2776-2777 ; R.GIULIANI, “Il Restauro dell’Arcosolio di Veneranda nelle Catacombe di Domitilla sulla via Ardeatina”, *Rivista di Archeologia Cristiana* LXX, 1994, pp.61-87.
- 10) ドミテイヤのカタコンベの考古学的・地誌学的研究に関する基礎文献は以下を参照 ; A. BOSIO, *Roma Sotteranea*, Roma, 1632, pp.195-273 ; P. STYGER, “L’origine del cimitero di Domitilla sull’Ardeatina”, *RendPontAc* 5, 1926-27, pp.89-144 ; R. KRAUTHEIMER, *Corpus Basilicarum christianorum Romae. Le basiliche paleocristiane di Roma (IV-IX secolo)*, vol. III, Città del Vaticano, 1971, pp.129-135 ; U.M. FASOLA, *op.cit.* ; P. TESTINI, “Nuove osservazioni sul cubicolo di Ampliato in Domitilla”, *Atti IX CIAC*, vol. I, 1978, pp.141-157 ; *Archeologia Cristiana*, Bari, 1980, pp.201-206.
- 11) FASOLA, *op.cit.*, pp.21-22.
- 12) *ibid.*, p.23.
- 13) V.FIOCCHI NICOLAI (altri), *op.cit.*, pp.52-53, fig.60.
- 14) FASOLA, *op.cit.*, pp.45-46 ; GIULIANI, *op.cit.*, pp.63-64, fig.2.
- 15) カタコンベ絵画における天国の表象に関しては以下に詳しい ; F. BISCONTI, “Sulla concezione figurative dell’《habitat》 paradisiaco : a proposito di un affresco romano poco noto”, *Rivista di Archeologia Cristiana* LXVI, 1990, pp.25-80.
- 16) DE ROSSI, *op.cit.*, pp.124.
- 17) *ibid.*, pp.82-87.
- 18) *Notula de ole ass. Martyrum qui Romae in corpora requiescunt* : TESTINI, *Archeologia* ..., *op.cit.*, pp.30-32.
- 19) AMORE, *op.cit.*, p.201 ; DI BERNARDINO, *op.cit.*, p.2776-77.
- 20) TESTINI, *op.cit.*, p.54.
- 21) A. FERRUA, *Epigrammata damasiana*, Citta del Vaticano, 1942, pp.101-104 ; TESTINI, *op.cit.*, p.19.
- 22) *ibid.*, p.20.
- 23) 同月 29 日とするものも存在する : AMORE, *op.cit.*, p.201.
- 24) *BHL* 6061 : DI BERNARDINO, *op.cit.*, p.2776-77.
- 25) TESTINI, *op.cit.*, p.23.
- 26) FASOLA, *op.cit.*, p.20-22.
- 27) *Liber Pontificalis*, DUCHESNE (ed.) vol. I, p.464, 466.
- 28) FASOLA, *op.cit.*, p.24.
- 29) 今日、使徒ペトロの娘ペトロニッラは伝説上の人物であることがほぼ間違いない

と考えられている。加えて1世紀の古代ローマ社会では火葬が一般的であり石棺は使用されない。したがって、石棺のペトロニッラが使徒の娘である可能性は皆無に等しい。また、殉教者ペトロニッラ本人のための石棺であれば、墓碑銘に殉教の文字が刻まれないのは極めて不自然である。ここで問題にする壁画のように、一般信徒の墓に描かれた聖女図像にさえ「殉教者ペトロニッラ」の文字が記されているのだから。

- 30) これまでのカタコンベの聖人図像研究のなかでは、美術史的視点に偏りすぎて、壁画が描かれている場所に関する地誌学的・考古学的要素が十分に考慮されてこなかったように思う。聖人図像の描かれた意図や性格は、当然、描かれた場所に応じて大きく異なることを見逃してはならない。
- 31) ローマの殉教聖人の墓や、彼らを記念した地下聖堂に描かれた聖人図像の作例は多数存在する。サン・カリスト・カタコンベのルチア地区にあるコルネリウスの墓（コルネリウス、キプリアヌス、シクストゥス、オッタトゥス）、ポンツィアーノのカタコンベの殉教者の墓（ポツリウス、ミリックス、プメニウス）、殉教図としては、カレポディオ・カタコンベのカリストゥスの墓などがあげられる。
- 32) DI BERNARDINO, *op.cit.*, p.2776-77.
- 33) この壁画はコモディッラのカタコンベの地下聖堂内部側壁に描かれているが、その壁画はあくまでも埋葬された個人の墓に集中したのもでもある。
- 34) V. FIOCCHI NICOLAI (*altri*), *op.cit.*, p.129, fig.144;
- 35) この問題に関しては以下の拙稿を参照されたい：「キリスト権威図像の出現：ドミティッラのカタコンベ・墓室 39 (NR) の図像プログラムを中心に」、西南学院大学『国際文化論集』第17巻・第2号、2003年、125-126頁。
- 36) 同書、112-117, 123-126頁。
- 37) 同書、125頁。
- 38) ヴィビアの墓に関しては以下の文献を参照：FERRUA, “La catacomba di Vibia”, *Rivista di Archeologia Cristiana* XLVII, 1971, pp.7-62; J. ENGEMANN, “Altes und neues zu Beispielen heidnischer und christlicher Katakombenbilder im spätantiken Rom”, *Jahrbuch für Antiken und Christentum* XXVI, 1983, pp.128-151, Abb. 4.
- 39) A. DONATI (ed.), *Romana Pictura—La pittura romana dalle origini all’eta bizantina* (Electa 1998), p.175; W.N.SCHUMACHER, “Die Katakombe an der via Dino Compagni und römische Grabkammern”, *Rivista di Archeologia Cristiana* L, 1974, pp.359-360, Abb. 17.
- 40) C.CECHELLI, *Monumenti cristiano-ereteici di Roma*, Roma 1944, tav.34.
- 41) 古代ローマの来世観に関しては以下を参照：; F. キュモン（小川英雄訳）『古代ローマの来世観』（平凡社1996）; K. ホプキンス（高木正朗・永都軍三訳）『古代ローマ人と死』（晃洋書房1996）。
- 42) 以下、「冥界への旅路」に関しては以下を参照：キュモン、前掲書、187-210頁。

- 43) アウレリウス家の霊廟に関しては以下に詳しい：F. BISCONTI, “L’ipogeo degli Aureli in viale Manzoni. Un esempio di sincresi privata”, *Augustinianum* 25, 1985, pp.889-903；宮坂朋「アウレリウス家の墓所—墓室2壁画サイクルを中心に」『美術史』（第42号1993年）219-231頁。
- 44) 「ハーデスの扉」については以下の辻佐保子氏の文献に作例を含めて詳しく論じられている：辻佐保子「死者の影あるいは復活—ヴィア・ラティナ・カタコンベ墓室Fの特殊な表現をめぐって」『ビザンティン美術の表象世界』（岩波書店1993年）205-226頁。
- 45) *Il Museo Civico di Velletri* (Comune di Velletri, Regione Lazio：ヴェレトリの市立博物館カタログ—出版年不明) pp.6-13；辻佐保子，前掲書，212-213頁。
- 46) 辻佐保子，同書，205-226頁。
- 47) N. HIMMELMANN, *Über Hirten-Genre in der antiken Kunst*, Opladen, 1980, tafel 41.
- 48) *Il Museo Civico di Velletri... op.cit.*, p.13.
- 49) CECHELLI, *op.cit.*, tav.34；SCHUMACHER, *op.cit.*, Abb. 17.
- 50) この洗浄修復作業は，筆者が教皇庁キリスト教考古学研究所大学院（PIAC）留学中に，教皇庁考古学監督局（PCAS）の協力のもとに修復士とともに行ったもので，その研究成果はローマ学派の研究論集に掲載された以下の拙稿を参照されたい：J. YAMADA, “L’arcosolio dell’ Hermes-psicopompo nel cimitero di S. Sebastiano：Qualche riflessione alla luce dei recenti restauri”, *Rivista di Archeologia Cristiana* LXXV, 1999, pp.281-305.
- 51) この図像は，1997年，PCASによって行われた洗浄修復作業によってより明確化された。なお，この修復によって問題の男性像の後方にさらにもうひとりの男性の顔が確認されたが，それが何者であるかは不明である。
- 52) 辻佐保子氏はこれを否定する：辻佐保子，前掲書，216頁。筆者はクラウザーの見解も十分検討に値すると思う。
- 53) 同書，214-215頁。
- 54) 聖書は，これら古代異教世界に存在した，人が死んだ後の魂の行方に関して明確なイメージや表象を語っていない。

図版クレジット

- 図1：V.FIOCCHI NICOLAI, F.BISCONTI, D. MAZZOLENI, *Le Catacombe Cristiane di Roma. Origini, sviluppo, appariti decorativi, documentazione epigrafica*, Regensburg 1998, p.130, fig.143.
- 図1b：R.GIULIANI, “Il Restauro dell’Arcosolio di Veneranda nelle Catacombe di Domitilla sulla via Ardeatina”, *Rivista di Archeologia Cristiana* LXX, 1994, p.78, fig.15.
- 図2：O. MARUCCHI, *Roma Sotterranea Cristiana. Descrizione analitica dei monumenti*

esistenti negli antichi cimiteri suburbani, Roma 1909, tav.I.

- 図3 : V.FIOCCHI NICOLAI, F.BISCONTI, D. MAZZOLENI, *op.cit.*, p.63, fig.72.
- 図4 : U.M.FASOLA, *Die Domitilla-Katakombe und die Basilika der Martyrer Nereus und Achilleus*, Città del Vaticano, 1989, p.48.
- 図5 : G.B. DE ROSSI, “Insigni scoperte nel cimitero di Domitilla”, *Bulletino di Archeologia Cristiana*, s II a VI, 1875, tav. I
- 図6 : GIULIANI, *op.cit.*, p.63.
- 図7 : *ibid.*, p.70.
- 図8 a : DE ROSSI, *op.cit.*, tav. I.
- 図8 b : GIULIANI, *op.cit.*, p.84.
- 図9 : *ibid.*, p.67.
- 図10 : 辻佐保子 (編集) 『世界美術大全集 西洋編 第7巻 西欧初期中世の美術』(小学館 1997年) 図版 53.
- 図11 : FIOCCHI NICOLAI (altr.), *op.cit.*, p..
- 図12 : 筆者撮影
- 図13 : G. WILPERT, *Le pitture delle catacombe romane*, Roma 1903, p.248 ; tav.132-1.
- 図14 : A. DONATI (ed.), *ROMANA PICTVRA* (Electa 1998) p.175.
- 図15 a - c : *Il Museo Civico di Velletri* (Comune di Velletri, Regione Lazio : ヴェレトリの市立博物館カタログ : 出版年不明) pp.6-13 に掲載図版.
- 図16 : A. FERRUA, *Catacombe sconosciute. Una pinacoteca del IV secolo sotto la via Latina*, Firenze 1990, p.92.
- 図17 : N. HIMMELMANN, *Über Hirten-Genre in der antiken Kunst*, Opladen 1980, taf.41.
- 図18 : C. CECCHELLI, *Monumenti cristiano-eretici di Roma*, Roma 1944.
- 図19 : 筆者撮影